

■対談

◆真っすぐなまなざし、清楚な姿、やわらかな声

河田 関西大学で学ぶ多くの学生も、いわさきちひろさんのほのぼのとして心温まる絵本や挿絵などを見て育ってきたと思います。いわさきちひろが亡くなったのが1974年の8月8日。今年で35年になりますが、その絵は少しも古びていないどころか、ますます輝きを帯びてきているようです。

関西大学では夏に理事会を白馬樹池高原ロッジで開催し、その帰りに安曇野のちひろ美術館を訪れることを恒例の行事にしています。理事の方々も、心が洗われるような、いわさきちひろの絵が大好きです。そうしたきっかけで、松本由理子さんとお知り合いになり、2年前から本学の客員教授を務めていただいています。

まず、いわさきちひろさんとの出会いや、そのときの印象か

らお聞かせください。

松本 私がいわさきちひろに初めて会ったのは1973年、21歳の大学生のときでした。当時はベトナム戦争の最中で、世界中でベトナム反戦運動が広がっていました。キャンパスの中でも反戦を語り合う学生も多く、その中の一人に誘われて遊びに行った家で、「おふくろがいるから紹介する」と言われて通されたのが、今、ちひろ美術館・東京に復元されている、ちひろのアトリエだったのです。

ドアをノックし、「どうぞ」というやわらかな声に誘われて部屋の中に入ると、絵筆を止めて、私のほうに視線を向けてくださった。茶色がかかった澄んだ瞳が、やさしく微笑んでいた。もの静かで優雅なのに、少女のような雰囲気がある。真っすぐなまなざしと女学生のような清楚さが印象的でした。

部屋には、彼女の絵が使われたポスターが貼られ、ピアノの

上には、オリジナル作品が額に入れられて何点か置かれていました。「可愛いな、なんてきれいで、透明感あふれる絵なんだろう」と思いました。ただそれだけだったら、「こういう絵を描く人もいるんだ」で、終わったかもしれません。ところが、画机の上に目をやったとき、ベトナム戦争の衝撃的な写真や新聞記事が目飛び込んできたのです。

こんなに控えめで反戦運動と無関係そうに見えるこの女性も、ベトナム戦争に関心をもっているんだとびっくりして、彼女の顔と資料の間に目を泳がせていたら、彼女が奥の和室に連れていってくれたのです。そこには絵本『戦火のなかの子どもたち』のために描かれた原画が畳一面に並べられていました。呆然と立ちすくむ少年、迫りくる炎をにらむ、赤ちゃんを抱いた母親、見る者の心を射抜くような少女の悲しげな瞳。心臓をわしづかみにされた気がしました。この人はどうしてこんな表現ができるのだろう、この人はいったいどんな人生を歩んだ人なんだろう。そのとき、いわさきちひろという人にもものすごく興味を持ってしまったんです。

◆「二階だけが家庭。階段を下りたら社会」

河田 それから約1年後、一人息子の猛さんと学生結婚され、その2カ月後にちひろさんは旅立たれたのです。人びとの心に残る大きな仕事をなさったいわさきちひろの最期はどんな様子でしたか。

松本 入院中は家族が交代で付き添っていたのですが、8月8日は私と姪御さんが病室の当番でした。お昼ごろ大量下血し、心臓が止まる直前、ちひろは「まだ死ねない」と言ったように、私には聞こえませんでした。享年55歳でした。

7月ごろから急激に悪くなり、水一滴飲むこともできず、痛みと吐血・下血に苦しんでいたのに、「夏(のお葬式)は(暑くて)来てくださる方が気の毒で申し訳ないわ」と気遣っていました。自分のつらさを口にしないで、いつも周りの人のことを考える人でした。

入院中、「こんどこそ、無欲の絵が描きたい」と言っていました。ちひろの夫は7歳半年下で、当時48歳。野党第二党の国会対策委員長で、多忙を極めていました。23歳の一人息子の他に、73歳の夫の母親、脳梗塞で倒れ半身不随の83歳のちひろの実母も同居し、住み込みや通いの手伝いの人もいたという大家族で、ちひろは精神的にも経済的にも、一家の支え手でした。彼らを残して死ぬことなどできない、何より、まだまだ、本当に描きたいものを描ききれないという思いがあったのではないのでしょうか。

ちひろは自宅で絵を描き続けた人でした。家は家族が暮らす場であると同時に、ちひろの仕事場でもありました。家族の一員となった私に、「二階だけが家庭なの。階段を一步下りたら、そこは社会よ」と話してくれたときの、ちひろの表情が忘れられません。

◆日本から失われたやさしさや、美しさを描く

河田 その後、松本さんは美術館を開設・運営し、ちひろの業

績や人となりを語る、いわゆる語り部として活動してこられました。ちひろは絵のほかにも、素晴らしい言葉を私たちに残してくれています。

「どんどん経済が成長してきたその代償に、人間は心の豊かさをだんだん失ってしまうんじゃないかと思います。私は私の絵本のなかで、今の日本から失われたいろいろなやさしさや、美しさを描こうと思っています。それを子どもたちに送るのが私の生きがいです」

これはまさに現在の日本や世界に通用する言葉で、今の時代を見越し、日本の社会を見通していた、すごい人だなあと感じます。

松本 その言葉、ちひろの原点だと思います。ちひろは、人びとがいちばん身近に接する絵こそ、芸術として素晴らしいものであるべきだ、そんな絵や絵本を描きたいと願っておりました。

絵本も教育も「感じること」が大切

絵本は文化や歴史の違いを超え、相互理解を可能にする

- 松本 由理子 ◆ちひろ美術館・東京 副館長
財いわさきちひろ記念事業団 事務局長
- 河田 倅一 ◆学長

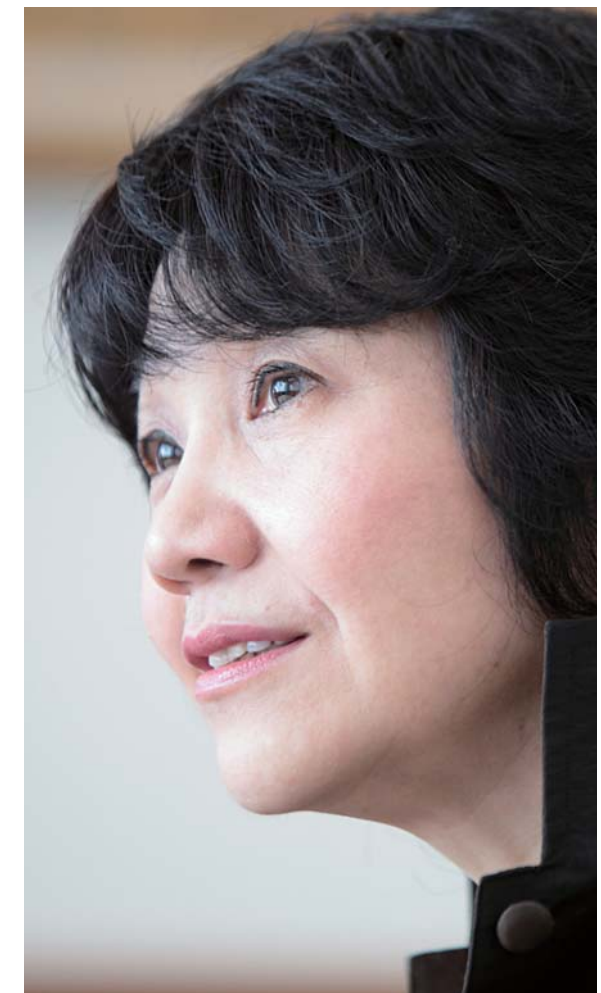
いわさきちひろの没後3年目に産声を上げたちひろ美術館は32年目を迎え、ちひろの作品9400点を含む世界の絵本画家の作品2万6500点を所蔵する絵本美術館に成長した。東京と長野の2カ所の美術館には、いわさきちひろが絵本に懸けた思いや子どもに託した願いが結実している。ちひろ美術館・東京の松本由理子副館長(本学客員教授)と河田学長が語り合う「絵本と過ごすかけがえのない時間の豊かさ」。



高槻ミューズキャンパスでは、小中高一貫教育を行います。感じるこの大切さ、情操教育を重視していきたいと考えています。



河田 倅一(かわた ていいち)
1945年京都市生まれ。大阪外国語大学中国語学科卒業。大阪大学大学院で中国哲学を専攻。86年関西大学教授。文学部長、副学長を歴任し、2003年10月学長に就任。1991年に在外研究員としてプリンストン大学で中国思想史を研究。文部科学省中央教育審議会臨時委員。同省大学設置・学校法人審議会委員。社団法人日本私立大学連盟常務理事。財団法人大学基準協会副会長。独立行政法人日本学術振興会大学教育等推進事業委員会委員。著書に「中国を見つめて」「書の風景」など。



松本 由理子(まつもと ゆりこ)
1952年生まれ。東京芸術大学音楽学部楽理科卒業。いわさきちひろの没後、ちひろの長男・松本猛氏と共に、ちひろ美術館建設に取り組み。近年は講演や執筆活動を通じ、ちひろとちひろが絵に託した思いを語り続ける。ちひろ美術館・東京副館長。財いわさきちひろ記念事業団事務局長。関西大学客員教授。「ちひろの世界」「ちひろ美術館ものがたり」「いわさきちひろ・若き日の日記「草穂」」など、多数の著書・編著がある。

成功することよりも、傷ついたりつらいことがあったり、願ったことがうまくいかなかったりすることによって、人間はいろんなことを感じとれるようになると思います。



◀「わらびを持つ少女」(いわさきちひろ・作)

白いままの作品も多いし、余白がいっぱいある。絵本も同じです。ちひろの絵や絵本は、知識を与えることが目的ではない。知るんじゃなくて感じるもの、見る人が想像を膨らませて「感じる絵」「感じる絵本」なんです。

今、知識や情報を教え込むことが教育と思われがちですが、世の中の物事には決まりきった正解があるとは限りません。自分で感じたり、感じたものから自分なりの思いを膨らませて人に伝えたり、あるいは、人の気持ちを思いやり、その人の気持ちになって考えられるということが、とても大切だと思います。

河田 関西大学が来年4月に開設予定の高槻ミュージックキャンパスでは、小中高一貫教育を行います。先日、そのシンポジウムがあり、基調講演をしてくださった作家の重松清さんも、やっぱり同じことを話しておられました。知識を詰め込むのではなくて、人の痛みや悲しみ、つらさを感じるのが大事で、そういうことに共感できる子どもをつくる教育が必要だ、と。今おっしゃった、感じることの大切さ、情操教育を重視していきたいと考えています。

◆心がきれいに、優しい顔になれる絵

河田 松本さんとは以前、山田洋次監督の映画「武士の一分」の試写会で隣同士になりました。関西大学の客員教授でもある山田洋次さんは、(脚)いわさきちひろ記念事業団の理事長を務めておられます。世代を問わず、大勢の方がちひろ

の絵のファンです。現在、ちひろ美術館にはどれくらい絵や絵本があるのですか。

松本 ちひろの死後3年目に、自宅跡に誕生したちひろ美術館・東京も32年目を迎えました。1997年には、ちひろの心のふるさとだった信州に、安曇野ちひろ美術館も開館しました。

美術館をつくるときに、単にちひろの絵を飾るだけの場所ではなく、絵を通してちひろが願ったことを受け継ぎ、それを感じとれる場にしたいと思いました。絵本って、子どもだけのものではないんです。大人と一緒に楽しむもの。絵本を読んでもらった記憶、ありますよね。大人と子どもが肌や呼吸を合わせながらコミュニケーションする、その時間がとても大切。「子どもが初めて出会う美の扉」でもあるのです。

そんな絵本の絵こそ素晴らしい芸術であってほしいと願い、未来を生きる子どもたちに夢と希望を託し、個性豊かな絵を描く絵本画家が、世界にたくさんいらっしゃいます。私たちはちひろの絵に限らず、人類の大切な文化財である絵本の絵を散逸させずに収集・保存・研究・公開していきたいと考えています。今、ちひろの作品が9400点、世界中の作品を合わせると2万6500点になります。

絵本は言葉が分からなくても伝わります。言語という垣根を

軽々と飛び越え、誰もが入っていける世界です。「子どもは、そのあどけない瞳やくちびるやその心までが、世界じゅうみんなおんなじだから」と、ちひろはよく言っていました。文化や歴史や宗教が違っていても、そこに絵本があって、子どもたちに愛情をもつ大人がいれば、相互理解が可能になります。世界の絵本画家の作品を見ることで、自分たちと違う文化や歴史、風土の中で生きる人たちに興味と共感をもってくれるとうれしいですね。

河田 ちひろ美術館を訪れたら、怖い顔をしていた人も、みんな出て来るときには優しい顔をしています。相田みつをの作品と似通ったところがありますね。やはり他人の痛みが分かり、つらいのを我慢して生きている人を慰めてくれるという共通点があるのです。

松本 昨年、相田みつをといわさきちひろが一緒になった『みんなほんもの』という本を作ったんですよ。

河田 「あなたのところがきれいだから なんでもきれいに見えるんだなあ」という相田みつをの詩があります。いわさきちひろの絵を見たら、心がきれいになる。あの絵に癒やされるというのは、たぶんこういうことなのではないでしょうか。

◆失敗してもいい「あなたがこの世にいることが喜び」

松本 いわさきちひろの絵って子どもしか描かれていなくても、画用紙の外側に、その子をすごく大切に思ってしっかりと見守っている大人の目があると思うのです。

ちひろは、「親からちゃんと愛されているのに、親たちの小さな欠点が見えてゆるせなかったこともありました」「大人というものはどんなに苦勞が多くても、自分の方から人を愛していける人間になることなんだと思います」と、後年、記しています。

例えば、いい成績を取るから、いい学校に入れたから、何かができるから、だから自分は親に愛されているんだと、子どもの方が思ってしまう。そうじゃなくて、何があっても、失敗をしようが何をしようが、あなたがこの世にいることが喜びなのよというメッセージが、ちひろの絵から伝わってくるんじゃないでしょうか。親御さんをお願いしたいのは、勉強が大切と思うのなら、子どもに強いるだけではなく、ご自身が、勉強なさればいいのではないかと。今は生涯教育の時代です。学ぶって楽しいことなんだって、逆に子どもが、本当の意味で勉強を好きになるかもしれない。

河田 そうなんです。関西大学は今後、小中高から大学、大学院の教育はもちろんですが、社会人教育にも力を入れて、一つのキャンパスの中で、「縦の関係」も大事にしたいと考えています。

松本 豊かで伸びやかな環境の中で子どもたちが学べるのは素敵なことですね。ただ、可能なら、「失敗をさせる教育」をしてほしいんです。小さな失敗をいっぱい重ねることが、どれだけ生きていくうえで大切か。成功することよりも、傷ついたりつらいことがあったり、願ったことがうまくいかなかったりすることによって、人間はいろんなことを感じとれるようになると思います。

今はあまりにも情報があすぎるからか、若い人たちが自分

を守るために、心に大きな壁を立てていて、自分の世界に他人が入ってくるのは苦手という人が多いようです。でも、関西大学の学生さんは、東京の人たちに比べると、本音で話している感じがします。

昨年の12月に、ちひろ美術館・東京に来られた関西大学の学生さんが、感想ノートにこんな言葉を記してくださいました。うれしくて、広報誌の『美術館だより』に載せたんですよ。

「今日は、建物見学が来館の一番の目的でした。この建物を見ている間、すごく穏やかな気持ちでした。自然・建築・ちひろさんの絵、1つ1つの関係性から生まれる時間を過ごせたからだと思います。絵や建築、いろいろなことで人が幸せな気持ちになれるものを創り出せることのすばらしさを、改めて実感しました。来年から設計の仕事します。この建物に負けたくない、素敵な建築を設計したいと思います」

河田 学長としては、掲載していただいたこともうれしいのですが、ちひろ美術館を訪れた学生(沖野正司君)が、こういう気持ちになって、明日に向かって自分の生きる目的を語ってくれたことに、とても感激しています。本日はどうもありがとうございました。



●ちひろ美術館・東京(写真上)
ちひろが最後の22年間を過ごし、数々の作品を生み出した東京・練馬区下石神井の自宅跡に建てられた美術館。展示室では、約2カ月ごとにテーマを変えて、ちひろや世界の絵本画家の作品を紹介するほか、企画展も開催しています。愛用の品々とともに、部屋ごと復元したちひろのアトリエ、ちひろが愛した草花が咲く「ちひろの庭」、3000冊の絵本をそろえた図書室、こどものへや、カフェやショップも併設されています。
〒177-0042 東京都練馬区下石神井4-7-2

●安曇野ちひろ美術館
長野県北安曇郡松川村は、戦後、ちひろの両親が開拓農民として暮らした土地。ちひろは折にふれてこの地を訪れ、心のふるさととして愛していました。館内には5つの展示室があり、いわさきちひろや世界の絵本画家の作品、絵本に関する歴史資料を展示しています。絵本の部屋、こどもの部屋、カフェやショップも併設。周囲には北アルプスを望む約32000㎡の安曇野ちひろ公園が広がっています。
〒399-8501 長野県北安曇郡松川村西原

ホームページアドレス <http://www.chihiro.jp/>